



千葉地本第33回定期大会「大会宣言」

大会宣言

JR東労組千葉地本は7月8日、TKPガーデンシティ千葉において「第33回定期大会」を開催し、この間の取り組みを猛省・謝罪した上で、組合員が主役の新しいJR東労組へと転換する方針を満場一致で決定した。

18春闘では「格差ベア永久根絶」を掲げ、スト権行使を含むあらゆる闘争戦術で闘う方針を決定した。しかし、駅や工務、かんり、きかくを中心とする仲間からの警告を無視して進んだ結果、実に4分の3もの組合員が脱退・離脱する事態を生み出した。「スト権確立と行使は別」「行使する際は再度丁寧に話し合う」と議論してきたにも関わらず、周知・対話をほとんど行わずにスト権行使方針を決定、報道されたことで、JR東労組への失望を招いた。さらに、「所定昇給額にこだわらない」との回答をもって「格差ベアを根絶した」と打ち出したことで、職場はそのことが真実か分からず疑心暗鬼となった。そして、団体交渉を終えずに戦術行使の予告を行ったことで「労使間の取扱いに関する協約」第70条に組合側が抵触し、「労使共同宣言」を失効、組合員の脱退・離脱は急速に増加していった。仕事が手につかなくなるほど組合員を悩ませ、追い込んだことを猛省しなければならない。

脱退届が次々に提出される中、安心して働ける職場を求める組合員からの苦しく悲痛な声を受け、千葉地本は悩みながらも3月2日に方針を転換し、3月5日に「組合員の皆さんへ」を発出、この事態を収めるために同じ境遇の各地本とともに本部臨時大会の開催を求めてきた。結果、4月12日の「本部第35回臨時大会」にて、職場の声を尊重し、全組合員が納得と共感の持てる運動づくりで新たな東労組としてスタートすることを確認した。そして6月13日の「本部第36回定期大会」では、18春闘を「決定的な失敗で大敗北」と総括した。千葉地本はこの総括の上に立ち、今定期大会で出された代議員からの指摘を受け止め、嘘や誤魔化しをすることなく、役員のためではない「組合員のためのJR東労組」を創り出し、謙虚かつ真摯に信頼回復へ歩み出す決意である。

一方、一部OB会員による「憂う会通信」なる書面の配布が明らかになった。新たな東労組づくりへ動き出した中央本部を「御用本部」と呼び混乱を持ち込むことは断じて認められない。千葉地本はこれらを「組織破壊」と規定し、毅然と立ち向かっていく。

現在、非常に多くの列車妨害が発生している。内部犯行説を煽る報道もなされているが、私たちはお客さまや社員・組合員の命を危険に晒し、大切な商品に傷をつける列車妨害を断固として許さない。私たちは最大限の警戒を行い、些細なことでも会社と事象を共有し、鉄道の安全を守り抜いていく。そして、東京オリンピック・パラリンピックに関連する線区を多く持つ地本として、何よりも安全・安定輸送に徹することで会社とともに大会輸送の成功を目指していく。

7月3日、会社は「変革2027」を発表し、人口減少や自動化などの変化を先取りするため、「ヒトを起点とした価値・サービスの創造」に転換する方針を示した。職場ではCBMなどのメンテナンス体制の見直しや乗務員勤務制度の見直し、AIやIoTを活用した技術革新・効率化の議論が進んでいる。JR東労組は、業務改革と生産性向上のための各種施策の確実な実行に向け、時間軸を意識してスピード感を持って対応していく。しかしその前提は、「安全・健康・ゆとり・働きがい」の観点により、会社の発展と組合員・家族の幸せを両立することであり、会社との真摯な団体交渉により、働く者の視点が入った人間味あふれる施策を創り上げていく。一方、様々な名称で結成された「社友会」では、団体交渉や労働協約の締結を行うことはできない。私たちは「組合員の利益を第一義とする」労働組合主義に基づき、会社との話し合いによる解決にこだわり、組合員にとって身近な問題の解決と労働条件・職場環境の向上を実現するために奮闘する。

私たちは今定期大会を転換点とし、明るく希望もてる「組合員のための新しいJR東労組」へと歩み出す。青年部をはじめ、分会や支部、部会・分科会で積極的にレク・サークル活動を行い、苦しさも楽しさも共有できる絆を創り上げよう。そして、この間踏ん張ってきた仲間を中心に、バスの仲間や出向・エルダー・プロパー組合員、そしてOB会の仲間と固くつながり、信頼を積み上げ、脱退・離脱を余儀なくされた全ての仲間へJR東労組への再加入を心から呼びかけることで、JR東日本グループの発展と組合員・家族の幸せを実現しよう！

以上、宣言する。